鹿児島県立博物館研究報告　第37号：67－69，2018

悪石島仮面神ボゼに利用される植物

久保　紘史郎

Plants Used for the Akusekijima Island's Masked God Boze

Koshiro KUBO

はじめに

当館では，2018年度に3階常設展示がリニューアルする。展示テーマは「鹿児島の人々と自然のつきあい方」で，鹿児島の多様な自然を紹介するとともに，生態系の中で，人々が自然を文化や生活の中で利用し，恩恵を受けてきたことも紹介する。その中で，悪石島の盆踊り行事に登場する，仮面神ボゼに利用される植物を展示することとなり，現地調査等を行ったので報告する。

なお，ボゼを含む悪石島の盆踊りの風習は，文献で残されているものではなく，先祖代々口承で受け継がれているものであることから，聞き取り調査も実施した。

また，ボゼの作製過程を島外の者に見せることは禁忌とされ，近年はそれが厳しく守られている。そのため，今回の調査においても，ボゼが作られる様子は直接確認することはできなかった。

図1　仮面神ボゼ

1　調査日程

2017年 9月 4日（旧暦 7月14日）
23：00　鹿児島港出港

9月 5日（旧暦 7月15日）
9：30　悪石島港着
午前：集落内聞き取り調査
午後：ボゼマラ作製調査，聞き取り調査

9月 6日（旧暦 7月16日）
午前：ビロウ葉採集調査
午後：ボゼ映像資料収集

9月7日（旧暦 7月17日）
7：20　悪石島発
18：50　鹿児島港着

2　ボゼの役割

ボゼは，十島村悪石島の盆行事で最後に登場する仮面神である。悪石島盆踊り保存会会長：有川和則氏（以後有川氏）によると，その役割は盆の時期に先祖の霊とともに集まる悪霊を追い払うことと言い伝えられているという。男性器を模したボゼマラという木の棒を持ち，赤土を女性に擦り付けるという行為からか，「子孫繁栄の神」とか「子宝に恵まれる」という考えが紹介される例があるが，島の言い伝えにそのような内容は含まれていない。

3　リュウキュウチクの利用

ボゼの仮面は旧暦の7月14日から作製が始まり，15

鹿児島県立博物館：〒892-0853　鹿児島市城山町1－1

日にのりを乾燥させ，16日の午前中に着色して完成する。

仮面は竹籠を加工したものを使用している。元々は悪石島に自生するリュウキュウチク（*Pleioblastus linearis*（Hack.）Nakai）で作った籠を使っていたが，近年では島民が竹籠を作らなくなったことから，島外で作られたものを利用している（渡山，2008）。目の上に大きくせり上がった眉は自生のリュウキュウチクを使用して作っている。竹籠とリュウキュウチクで作った骨組みの上に紙を張り付け，墨汁と赤土で着色する。

4　ビロウの利用

身に着ける植物で主となるのがビロウ（*Livistona chinensis*（Jacq.）R.Br. ex Mart. var. *subglobosa*（Hassk.）Becc.）の葉である。渡山（2008）は明治41年生まれの島民の話として，「昔のボゼはコバ（ビロウ）の葉ではなく，シュロ毛で蓑を作り，体を隠していた。シュロ毛が足りなくなってコバ（ビロウ）の葉を使うようになった。」と記している。また，昭和7年生まれの島民の話として，「子供のころのボゼはコバンハ（ビロウの葉）ではなく，ツグンハ（シュロ毛）で体を隠していたのを覚えている。」とも記している。これらのことから，昭和の初め頃のボゼはシュロの葉鞘を身にまとっていたと思われる。その後，シュロの数が減り，十分なシュロの葉鞘を集めることができなくなり，現在のようにビロウの葉を使うように変化していった（渡山，2008）。

ボゼが現れる旧暦の7月16日午前8時ごろ，ビロウの葉は採集される。ビロウは集落内にも自生するが，ボゼ3体で60枚程度のビロウ葉が必要となることから，島の東部にある湯泊温泉付近にあるビロウ群落から採集される。身に着ける部位ごとに，適する葉の大きさが異なり，大・中・小に分けて採集される。ボゼ1体に必要なビロウ葉は15～20枚ほどだが，不足することがないように多めに採集する。採集されたビロウ葉は，葉柄部分を切り落とし，葉の部分だけがボゼに利用される。

下野（1994，2009）は足にシュロ皮をあてると述べており，渡山（2008）はビロウ葉の蓑からはみ出る部分はシュロ毛で覆い隠すと述べているが，現在はシュロ皮（毛）の代わりにビロウの葉鞘が用いられている。有川氏によると，以前は集落内にあるシュロ（*Trachycarpus fortunei*（Hook.）H.Wendl.）の葉鞘を用いていたが，現在ではシュロが少なくなり，10年以上前からビロウの葉鞘で代用することが定着しているという。現在，島民が確認しているシュロは集落内の1本だけである。

図2　採集されたビロウ葉

図3　採集されたビロウの葉鞘

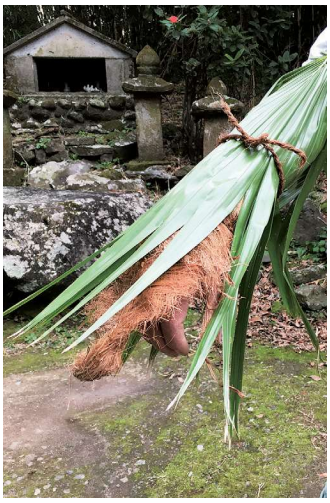

図4　ビロウ葉と葉鞘で覆われた腕
（写真提供：井上禎人）

図5　唯一確認されているシュロ
（写真提供：井上禎人）

5　タブノキの利用

ボゼが手に持つボゼマラと呼ばれる棒は，島内に広く自生しているタブノキ（*Machilus thunbergii* Siebold et Zucc.）で作られている。ボゼマラに利用されるタブノキは，集落近くやテラと呼ばれる墓地に自生するものが利用される。直径6cmほどの枝を切り落とし樹皮を剥いで加工する。ボゼマラは適当な曲がりがあることが重要とされ，直線過ぎない枝を選んで切り落とす。切り落とした枝は基部の太い方がボゼマラの先端となり，枝先側の細い方がボゼマラの基部として利用される。

ボゼマラの先端は男性器を模してつくられる。のこぎりで切れ込みを入れた後，ナタや小刀を使って樹皮を剥ぎながら，形を整えていく。枝の伐採から樹皮の剥ぎ取り，整形まで，熟練した者が作業した場合40分程度の工程である。この作業は旧暦の7月14日，つまりボゼが出現する日の前々日に行われ，旧暦の7月16日，ボゼ出現の当日に赤土の泥が塗られる。

有川氏によると，ボゼマラは毎年作ることを基本とするが，最近では数年使い続けることもあるという。

また，ボゼマラは両手で持たれ，両手の間にある柄の部分を，女性や子供などに押し当てて，赤土の泥を塗りつける。先端で突くような使い方はしないという。

6　まとめ

ボゼは，悪石島内で容易に入手できる植物を利用して作製されている。そのため，数が減り入手が難しくなったシュロの繊維は，昭和の初め頃までは全身を覆っていたものが，前腕と下肢を隠すだけに使われるようになり，近年ではそれもビロウの葉鞘で代用されるように変化していった。このように，時代の変遷により，ボゼ作製に必要な植物は微妙に変化し，時代を越えて受け継がれていくのだろう。

謝辞

今回の調査にあたり，悪石島盆踊り保存会会長の有川和則氏にはボゼマラの作製や，ボゼに関する伝承についてご教授いただいた。また，（株）乃村工藝社の井上禎人氏，満長正明氏には，悪石島に生育するシュロの確認をしていただき，写真を提供していただいた。この場をお借りして厚くお礼を申し上げたい。

引用文献

下野敏見（1994）トカラ列島民俗誌：57-70.

下野敏見（2009）南日本の民俗文化誌3　トカラ列島：338-341.

渡山恵子（2008）悪石島のボゼに関する考察．鹿児島民俗（133）：8-14.

図6　切り出されたタブノキの枝

図7　小刀で皮を剥ぎ成型する